

# 講演会 これからの子ども×生成AI

## 概要記録



2025.11.15 君津市周西公民館



講師

鈴木 秀樹 さん

- 東京学芸大学附属小金井小学校教諭、慶應義塾大学非常勤講師、東京学芸大学ICTセンター所員・慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻修士課程修了。私立小勤務を経て2016年より現職。
- ICTを活用したインクルーシブ教育、学習者用デジタル教科書、生成AIを活用した授業づくり等が主要な研究テーマ。

生成AIが社会で注目を集め、「ブーム」とも言える広がりを見せています。この技術はすさまじいスピードで進化し、私たちの暮らしの中に、ますます深く入り込んできています。

これからの時代を生きる子どもたちにとって、生成AIは「当たり前」の存在になるでしょう。

では、そんなとき私たち大人はAIとどのように向き合い、子どもたちに何を伝えていけばいいのか――

このようなことを考える合う講演会を、2025年11月15日に開催し、会場・オンライン合わせて39名の皆さんが参加しました。

### 生成AIの

### イメージは？

生成AI（以下、原則的に「AI」と記載）をどれくらい使ってらっしゃいますか。使ったことがない、何度か使ったことがある、たまに使う、週に一度、週に二・三度、使わない日はない。――みなさん、様々ですね。

今の段階で生成AIの学校教育での利用についてはどうでしょうか。一切使うべきではない、ちょっと心配、だいぶ良い、積極的に活用すべき。――このイメージも、やはりかなりバラエティ豊かですね。

次に、子どもたちが、日常

的にAIを利用するようになることについてどう考えでしょうか。一切子どもたちは使うべきではない、積極的に使うべき。——これへの回答もバラバラですね。

次は具体的な場面でのAIの使い方はいかがでしょうか？

- 高校の授業のレポート課題で、AIが作成した文章をほぼそのまま提出する。

- ある市の観光課で、町の魅力を伝えるポスターを作ることにになり、デザイナーがAIで美しい画像を作った。

- ある自治体の公民館で「これからの子どもとAI」という講演会を依頼されたのだが、何を話せば良いのか分からないので、AIに講演原稿をつくってもらった。

- 3年付き合った恋人にプロポーズをするために、AIにプロポーズの言葉を考えてもらって、それ

をプロポーズの言葉にすることにした。  
——肯定的・否定的な反応が分かれますね。

## なぜ、生成AIなのか

今、確かにAIが世の中で広く言われるようになってきて、利用が広まっています。しかし、よく考えてみると、「この場面でどうなのかな」「この場面で使っているのかな」といったことはたくさんあるわけです。

今、私も小学校の教師をしながら、子どもたちに「こういう使わせ方はいいね」とか、「いや、こういう使い方はちょっとダメでしょう」とか、「子どもたちがこんなことに使ったら心配だよ」といったことを、職員室で毎日のように話をしています。そういう過渡期に今あるのだろうと思います。

しかし、日本の今の子どもにおいては、おそらくAIを使わないという選択肢はあり

えません。

日本は2050年には、人口が1億人を割り込む程度になり、さらに生産年齢人口の割合が、5割程度になってしまします。これは、働いている人1人が自分ともう1人を完全に養わないと、この国はやっていけないという状況になるということです。そういう状況においては、もうAIを使わざるを得ないという時代が確実に訪れます。

実際、私たちがついこの間まで人から受けていたサービスを、今受けられないことがたくさんあります。例えば、コンビニ等のセルフレジ、セルフのガソリンスタンド、銀行のインターネットバンキング、ファミレスでのご飯を運ぶロボット。ニュースによると、自動車教習所の教習車を無人にして、AIが教えるというものが、試験的に始まるそうです。

AIを利用し、人を使わないということは、すごく増えています。人口、特に生産年齢人口が減る中であっては、



もうAIを使わないという選択肢はおそらくありえないだろうと思います。

## AI時代がもたらす変化

海外では情報技術系の世界的大企業の人員削減の報道がありました。何十年も実績を積み上げてきた人が50歳ぐらいで解雇されて、もう再就職先が全然無いというようなことが起こっているそうです。

そうになると、やっぱりこれから自分はどんな仕事をしていこうか、ということが求

められているのか、というのは真剣に考えざるを得ません。

最近、「ホワイトカラー」、

「ブルーカラー」の逆転現象が起こっているというニュースをよく目にします。事務に関わるようなオフィスの仕事がAIにとって代われ、それに対して、実際に技術を持って働いている方、体を動かして働いている方は仕事がたくさんあり、収入が高い、という逆転現象がアメリカでは起き始めているそうです。日本ではそこまで急激に変わらないとは思いますが、多分、徐々にそういう方向には行くだろうと思います。

この記事にはこんなことが書いてありました。50代後半のホワイトカラーは逃げ切り世代、40代から50代前半は戦々恐々、AI代替失業となったら、再就職は難しいかもしれない。20代、30代はリスキリングに取り組み始める時期かもしれません。10代の学生はAIによる代替性という視点から何を学ぶか、どこ

まで進学するかを考慮する時代になりつつあるようです。

（「AI進化でホワイトカラー就職難。米国でブルーカラービリオネア増加？日本はどうなる？」高橋成壽）

つまり、今までホワイトカラーになるには、倍率の高い大学を卒業しなければならなかったのですが、それよりも高卒でブルーカラーとしての働く方が高収入なら、大学行きますか、という話ですね。

しかし、ブルーカラーも安泰ではありません。アメリカでは数週間前、家政婦ロボットの予約が始まったのです。AIを積んだ人型のロボットが、洗濯物を畳んだりしてくれるのです。これが一般的になってくると、ブルーカラーの仕事もどんどん奪われる時代ですね。

一体、私たちはどうしたらいいのか、本当に考えなくてはいけないと思うわけです。怖がらせているわけではないのですが、「そういう時代が来ているですよ」ということです。

## AIの歴史と

### 文科省の動き

実はAIは歴史が古いのです。第一次AIブームが、1960年代にありました。第二次AIブームが、80年代、90年代ぐらいにあったのですが、私はその頃大学院生で、当時の人工知能ブームに熱中しました。

そして、今、第三次AIブームが来ています。2017年にグーグルがトランスフォーマーという技術を発表し、このあたりからAIの進化が急激になりました。いわゆる機械学習という、AIが学習して頭が良くなっていくという技術の基本が、2017年ぐらいにできたわけですが、そこからがすごい勢いで進みました。2022年の夏に、Microsoftなどの画像生成AIが出てきます。その年の秋にChatGPTが出てきて、世界中大騒ぎになりました。2023年3月、おそらく日本で初めての生成AIを活用した公開授業を私が行った

のですが、それが物珍しかったので、朝日新聞が取り上げてくれました。

まだこの頃は「AIって何？」という感じでしたが、そこから進歩が激しく、2023年7月には、文科省がガイドラインを出します。なぜ7月に出したかというと、夏休みを迎えるにあたって、学校現場から「これどうすんだ？」という声がすごく上がっていたからです。このガイドラインの中には「コンクールなどに、AIがつくったものをそのまま提出するのは不適切ですよ」みたいなことが明確に書かれたりしました。

## 生成AIで

### 可能なこと

今、AIがどれぐらいのことができるかということを試してみたいと思います。

●『羅生門』の感想を書いてください。ただし、中学3年生が書くような文章にして



ください。感動したみたいなことではなく、批判的な感想にして下さい」

#### とChatGPTを入力

AIは指示通りに、真っ当な文章を返してくるわけですね。これを、その子がいいたのかAIが書いたのかは、付き合いがすごく濃密な先生と子どもだったらわかりますが、100人、200人を見ている大学の授業だったら、絶対わからないだろうと思います。

#### ●NotebookLMに、総理大臣の所信表明演説のPDFを入れ、音声解説を作らせる

2人の人が会話するようにラジオ番組風に解説してくれます。

文章の中には、字面だけを追うのでは分かりにくいものがありますが、AIに音声解説を作ってもらうことで、分かりやすくなるものもあります。

このようなことが、簡単にできるように今なってきました。

## 子ども自身が生成AIを使う時代へ

2023年7月に出された文科省のガイドラインは、2024年12月にバージョン2となりました。「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」このガイドラインが出た後、今年になってAIの活用が学校で広がっています。

それまで、AIサービスを提供する企業によって、13歳未満は使えないとされていたのですが、今年の8月、グーグルが「Gemini」における教育機関向けアカウントを全年齢展開するということにルールを変えました。教育委員会が子どもに配布している端末（タブレット）に制限をかけるなければ、日本の多くの学校では今、子どもたちが自由にAIを使える、もう、そういう時代が始まっています。これは一体何を意味するの

でしょうか。

例えば、歴史の穴埋め問題のような宿題は、AIに放り込めば、すぐに回答がでるわけですね。

授業での場面も考えてみましょう。国語の授業で、先生が「〇〇はこの時、何を思った？ノートに書きましょう」と言ったとします。子どもは、デジタル教科書のその教材の全ページをスクリーンショットしてAIに入力し、AIへ「〇〇はこの時、何を思ったか、考えられること3つ上げて」と指示します。するとAIが、もっともらしい理由をつけて答えるわけです。

先生が子どもたちに「ノートに何と書きましたか？」と聞けば、子どもはAIの回答を答える、ということが起こりますし、そういうことができるようになったということです。

もうこれからの時代、AIに聞けばなんともなることを子どもに向けても学びにならないということです。

## 年齢制限と家庭での生成AI利用

AIには色々な種類があります。

先ほど、全年齢使えるようになったと言いましたが、これは、グーグルの「Gemini」というAIで、さらに学校で配布しているアカウントで使う、組織向けAIの場合の話です。

マイクロソフトは慎重で、相変わらず年齢制限を設けています。自治体によって学校で使用しているシステム（企業）が違いますから、民間企業の考えの違いによって、公教育の内容に差が生じることが合って良いのかということは議論になると思います。

これは、企業が主導権を持つのでは無くて、公教育を担う側が判断の主導権を持つべきだろうと思います。つまり、グーグルを使っているも、その自治体が自分たちの

まちの子どもにはAIはまだ早いと考えれば、

機能をOFFにする方法もあります。あるいは、マイクロソフトを使っている自治体  
が、子どもたちにAIを使わせるべきだと考えれば、（実際はそんなに簡単ではありませんが）グーグルに切り替える判断もあるわけです。

一番良くないのは、グーグルの全年齢展開を教育委員会も学校も気付かずについて、子どもたちが勝手にAIを使える状態になっていることです。

また、家庭での子どものAIの利用についても、学校で配布されているアカウントで使う、組織向けAIを使ってください。

そうではなくて、個人で、例えば無料で、またはアカウントも作らないで使うようなものは、ダメだと教えなければなりません。

個人情報なども含めて入力した内容が全部データとして抜かれてしまいます。つまり子どもが何か変なことを書き

込んだら、それも全部学習されてしまうわけです。ですから、そのような安全でないAIは使ってはいけない、というのは教えなくてはいけないところですよ。

普段のいわゆる検索についても、アカウントによって、安全・リスクのそれぞれがあるということ、大人が教える必要があるところです。

学校できちんと使えるよう設定して「これは安全。でも他のものは危険だから止めよう」と伝えるのが一番シンプルでいいと思います。

また、今日の冒頭でいろいろなAI活用想定場面への賛否をお尋ねしましたが、家庭でもお子さんと、「この使い方ってどうだろう？」と話合いう時間をたくさん持っていただと良いと思います。そこから、良い意味で批判的にAIを使えるような子どもに育っていくのではないのでしょうか。

学校と家庭、両方からのアプローチができるの良いと思います。

## AIを

### 使うべき理由

### （学びの困難）

先ほど、学校の授業とAIのお話をしました。

「学校でAIなんて使えなくさせればいいのに」といいようなことを言う方もいらっしゃると思いますが、私はそう思っていない、やっぱりAIを使わなければならないと思っています。

なぜAIを使うのか、の前になぜICT（子どもたちのタブレットなど）を使うのかということをお話ししなければなりません。

内閣府の資料によると、小学校35人学級とした場合、不登校が0.6人、不登校傾向が4.1人、発達障害の可能性がある子供が3.6人、得意な才能のある子供（ある部分はすごくできるが、他の部分は苦手という子もいる）が0.8人、家にあ  
る本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供が11.5人、日本語を家であまり話さない子供が1人いるという統

計データがあります。中学校では不登校の子どもの数値が増えます。

色々な子どもが在籍しているというのが、今の日本の学校の現状です。その中であって、やはり学習に困難を抱えている子どもたちが割といます。

子どもたちは、

- ①入力（教科書や先生の話から情報を得る）
- ②自分の頭の中で処理する
- ③出力（発言、テスト、レポートなど）

ということを繰り返しています。

ところが、この①入力と③出力のところに困難を抱えている子どもが結構います。そこにICTを掛け合わせてあげるとなんとかなるということがあります。

例えば、①入力の場面。活字を読むことに困難がある子どもには、「読み上げ音声」を聞きながら読んでいいよ」と言ってあげれば、教科書の内容がちゃんと頭に入ってくるということになるわけです。それから、③出力の場合、

紙に鉛筆で書くことに困難がある子どもには、「タイピングでいいよ」と言ってみよう、出力の問題は解消されるわけです。

このようにICTを使うと、子どもたちの困難をなくしていこうということをずっとやってきました。

そしてついに、②の考えるところでつまずいて勉強ができない子どもに、AIが寄り添うことで勉強ができるようになるという時代が訪れつつあります。

私がICTやAIを使った方がいいと思うのは、それによって、学びに困難を抱えている子どもたちが学べるようになるという現実があるからです。



## 生成AIを活用した授業実践

これまで、13歳未満はAIが使えませんでしたので、先生がAIを使うということでしたが、先ほどお話ししたように、子どもたちも使えるようになったので、子ども達自身もAIを使って学ぶということの両方を行うようになってきました。

具体的な授業での事例をご紹介します。

### ▼事例1（道徳）

#### 思考を活性化させる

まず、先生がAIを使って授業の改善を図る事例です。道徳の教材で、登場人物3人の考え方についてどのように考えるのか議論するという授業です。

子どもたちの喧々諤々の議論の後、教師が子どもたちから出た観点を整理します。そこで、他にどんな観点があるかをAIに出してもらって、たくさん出てきます。する

と、1つの事象に対しての観点が複数にあることを子どもたちは学ぶことができます。

また、極端な意見をAIに出させたり、AIに議論のシミュレーションをさせたりして、子どもたちが考えるきっかけにするという方法もあります。

AIに答えを聞くのではなく、AIによって子どもの思考を活性化させるということは、やるべきだと思っています。

### ▼事例2（道徳）

#### AIとの対話で言語化する

ことで自身の思考を深める

次は子どもたちがAIと対話をする事例です。

これは、子どもを傷つけるような言葉がでないようになどセキュリティがかかっている教育用AIを使いました。

（一般的なAIを使う場合も、教師の方でカスタマイズする必要があります。）

子どもはAIと対話した後、友達と対話し、クラスで共有して、自分の結論を持ち

ましようという授業でした。

題材を読んで、割と厳しい、突き放したような意見を書いてきた子どもがいました。

た。AIは、「なるほど、とても現実的な考え方ですね」とか、「率直で自分の気持ちをはっきり伝えてくれてありがとう」というふうに、まずは受け止めます。

かなり長いやり取りが子どもとAIの間でありました。そのたびにAIは毎回、その子の言ったことを、どんなに極端な意見だろうと、まずは受け止めて、次の問いを出すということをやりました。

すると、この子も気持ちだんだん変わってきたのです。

最終的に、この子どもは最初の考えとは、随分雰囲気の違いのような考えになっていきました。

これが対人だけの授業だったら、子どもは最初の自分の気持ちを出せなかったのでは無いかと思います。

相手がAIだとはっきり意見を出せた上で、何度も何度も対話を続けることができました。

自分の気持ちを繰り返して言語化することで、言語化しないとわからないことに気づき、また冷静に考えを深めることができました。

教師が同様に寄り添うことができればそれは可能だったかもしれませんが、教師は1人しかいません。AIを使うからこそできることではないかなと考えています。

### ▼事例3（国語）

#### A I が実現する協働的な学び

ある教材の魅力を伝える文章を書いて、子ども同士で話し合い、魅力についての考えを広げようという授業です。

最初の「魅力を伝える文章を書く」というところでつまずく子どもがいます。それにAIが寄り添うという事例です。

自分で文章を書ける子どもは自分で書きます。それが難しい子どもには「書いて答えるAI」と「選んで答えるAI」を用意しました。「書いて答えるAI」を使う子ども

は、AIとの対話を進めていくと、文章ができます。「選んで答えるAI」では、子どもはAIが出す選択肢の中から選ぶだけで、AIが文章を書いてくれます。それをもっと話し合いをしましょう、ということにしました。

これまでの授業では、学力上位の子どもは文章を書けるけれども、文章を書き終われない子どもは、話し合いの土台に乗れないという問題がありました。そこで、AIが寄り添って、話し合いの土台の上まで乗っけてあげることを目指しました。

AIで作った文章が本当にその子どもの考える魅力を伝える文章になっているかという、そんなことはありません。その文章を持って話し合いをすると、「私の考える魅力は○○なんだけど…。でも、AIはこう書いているけれど、私が本当に思ったのはこうではなくて、△△なの。」などと話し始めるのです。なぜ、これが言えるかというと、自分の考えを完璧に表し

たわけでは無いけれど、AIがつくった文章があったからです。何も無いところからは言えません。

この事例では、自分で文章をかける子どもには書かせました。しかし、ほぼ全員が最初から楽な方（AIに頼る）という場面もあるかもしれません。

そのような場面も必要だと思いますし、一方で、AIを使うのも良いことばかりでは無いという体験も必要だと思います。私の経験では、作文を子どもたちにAIを使って書かせたときに、「こうじゃなくて、こう書きたい」みたいな細かなことはAIはなかなか汲んでくれない、だったら最初から自分で書いた方が良いという体験をする子どもが出てきます。

いろいろなAI体験を積ませることで、AIを使った方が良い場面、自分でやったほうが良い場面、自分が好きでこだわりたいことなどを子どもがわかるようになってくると思います。

## A I を使うと子どもは考えなくなるのか

先ほど紹介した文科省のガイドラインには、「学習課題やテストの内容によっては、児童生徒が生成AIを用いることで簡単にこなせる可能性があることも前提に、課題の内容等を吟味することや、問題の本質を問うこと、深い意味理解を促すことを重視した授業づくりを行うことも期待される。」とあります。

そこで私が考えたのがこのような授業です。

5年生の国語で、文章に説得力を持たせるためにはどうするかという単元です。意見文を書く授業になります。

まず、教師があるテーマでAIに意見文を書かせて、子どもたちに見せました。すると子どもたちは、その文章の様々な部分に「それはダメ、ここはダメ」と言ってきた。言葉遣いだったり、そもその内容が違おうという主張



であったりしました。

次に、同様に、子どもたちにも、自分のテーマでAIに意見文をつくらせます。そして、生成された意見文について、子どもたちに自分で修正・加筆させました。

子どもがAIを使うことで「考えなくなる」のならば、なにも修正や加筆は行われなはずで。しかし実際は、真っ赤かに修正されたものばかりでした。なぜでしょうか。

子どもは、自分の意見文にしたい気持ちになったと考えられます。そして、この課題に納得していたからということも大きいと思います。

つまり、AIを使って子どもが考えるか、考えなくなるかということについては、子どもがその課題に納得しているか否かが大きなポイントだと思っています。子どもたちが納得して取り組める授業を教師ができるかどうかにかかっているのだと思います。



## 変えられないものと変えるもの

AIに聞けば何とかなるような問いを子どもに向けても学びにならない時代になっていきます。

私たちが考えるべきは、子どもがAIを使うことで考えなくなるような問いではなく、AIを使うことで考えるようになる学びには何が必要かということです。

一つは、教科等への知見です。何をねらいにしているのか、どんな活動を子どもにさせると子どもはどんなことを考えるかという知見が教師にきちんとあることが必要だと思います。

また、これからの時代、その教科で普通に教えてきたことが本当に必要なかを問い直す必要があるかと思えます。AIでできることだから教える必要がないのでは無くて、AIを使いこなすために教えなくてはいけないこともあると思います。

逆に、AIを使うことでもう必要が無くなることも現在の教育課程の中にあると思います。その見極めがすごく大事だと思っています。

二つ目は、変化を厭わない態度です。AIの登場は大変化です。今までの普通が通じないことが起こっています。その変化を受け止めることが必要です。

そして三つ目は、子どもに学ぶということです。先ほどの子どもとAIが対話を繰り返した事例から、私は教師としてすごく学びました。

この3つを挙げましたが、とても忙しい現場の教員にとっては、これらを受け止めることは大変厳しいことでもあります。

そこで最後に、私を支えてくれている言葉を紹介したいと思います。1960年代のアメリカの神学者であるライオンホルト・ニバーの祈りの言葉です。

**「神よ、変えることのできないものを静穩に受け入れる力を与えてください。」**

**変えるべきものを変える勇気を与えてください。**

**そして、変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えてください」**

AI時代だとうでしょう。

変えられないものは、これからの子どもたちは生成AIと共に人生を歩んでいくということです。これは間違いありません。

変えるべきものは、子どもたちが正しく生成AIと共に人生を歩んでいけるようにするということです。そのためには「子どもはAI禁止」では解決しないと思います。むしろ、正しく子どもたちが考えるようにAIを使うことが求められると思います。

つまり、私たちが問われているのは、子どもたちが正しく生成AIと共に人生を歩んでいけるように教育を変えていく勇氣があるかだと思います。

文責 君津市周西公民館 中村

\* 当日の講義内容を踏まえた上で、順序の入れ替え・編集をしている部分があります。  
\* 質疑に対する回答の一部も本文として組み込んでいる部分があります。